

〈研究論文〉

『全知識学の基礎』衝動論にひそむ転回点

——『基礎』から『新方法』への移行過程をめぐって——

平井 涼

はじめに

イエーナ期のフィヒテにおいて、『全知識学の基礎』(1794-95年、以下『基礎』と略記)から『新たな方法による知識学』(1796-99年、以下『新方法』と略記)へと、体系構成がどのように変容したかは重要な問題である¹。こうした変容の過程を究明するには、さまざまな角度からの考察が必要となるが、本論ではこの移行過程において衝動論が果たした役割に着目してみたい。

『基礎』では、実践的部門の後半部が開始された時点で、体系構成を主導する方法に重要な変化が認められる。第一に、発生的演繹と呼ばれる方法がこの時点に至って全面的に導入されている。哲学者の側が第三者的に自我の構造を分析し総合する過程に代わって、哲学者の観察の対象である自我が自己を反省する過程が追究されるようになる²。第二に、こうした過程をとおして理論と実践のあいだに横たわる分断がはじめて克服され、両者は緊密に統合された仕方で演繹されるようになる。『基礎』において、以上の変化が顕在化する地点こそが衝動論なのである。

方法論をめぐるとこの転換自体はおそらく当初から予定された計画に基づくものであったと推測されるが、『基礎』の時点では、この新たな方法は本来の射程を生かし切ることができないまま、不十分な結果に終わっている。しかし、これを契機として方法論への自覚が深まったことで、これまでの体系とは異なる新たな体系がフィヒテのなかに芽生え始めたのではないか。こうして成立したのが『新方法』であると思われる。『新方法』では、体系構成を主導する方法が最初から発生的演繹に見定められ、理論と実践はもとより緊密に統合された仕方で演繹されている³。『基礎』の

¹ フィヒテからの引用はアカデミー版に依拠し、括弧内に系列数と巻数、頁数のみを記した。『新方法』のテキストには主にハレ手稿とクラウド手稿が存在するが、本論で取り扱う範囲に関しては内容上の一致度は高い。それゆえ、細かい字句の解釈には立ち入らず、体系の大枠のみを考察する本論においては、両者を殊更に区別する必要はないと考え、引用箇所は一箇所を除いて、校訂がより詳細になされているとされるクラウド手稿に依拠した。

また、引用の際には、原文の強調はいずれも解除した。亀甲括弧で表した部分は筆者による挿入である。

² 実践的部門の後半部において、根本原則からの演繹に基づく方法が自己意識の歴史に基づく方法へと転換を遂げている、と見なす解釈として以下の論考を参照した。『新方法』をはじめとするイエーナ後期の知識学においても、後者の方法は多少の変更を伴いながらも継承されている(Jürgen Stolzenberg: „Geschichte des Selbstbewußtseins“, Reinhold-Fichte-Schelling. In: Internationales Jahrbuch des Deutschen Idealismus, Bd. 1, Berlin (Gruyter) 2008, S. 93-113, bes. S. 98-106)。

³ 理論的部門と実践的部門が分断された『基礎』では、理論と実践の統一が完全には確立されていなかったのに対し、こうした欠陥が『新方法』で克服されるという点については、以下の基本的な研究で明確

最後に生じた方法上のこの転換こそが『新方法』の成立を準備し、その母胎となったと考えてみたい。

『基礎』と『新方法』をつなぐ結節点が以上のように衝動論に認められるのだとすると、衝動論に着目することで、『基礎』から『新方法』へと至る移行の過程はより判明に再構成されるのではないか。こうした試みに挑むのが本論における課題となる。衝動論を丹念に分析することで、フィヒテが二つの時期をとおして何を継承したのか、『基礎』のどこで躓き、その欠陥を『新方法』でいかに乗り越えたか、がおのずと浮かび上がってくるはずである。

そこで本論では、まず第一章で『基礎』を論じ、衝動論の基本的な枠組を確認しておこう。そして第二章では、『新方法』(の特に前半部)へと転じ、こうした枠組が新たな体系にどのように接続されたかを解明してみたい。以上の作業をつうじて、衝動論がふたつの知識学を媒介する役割を果たしている、という事実がテキストに即して解明されるだろう。さらに、『新方法』に至って意志論が導入されたことで、衝動論がこの新たな体系の内部でどのような役割を果たすことになったか、という点についても考察してみたい。体系構成の変化に伴って、『新方法』では、衝動論の果たす役割がより明確化されていると考えられるからである。

1

『基礎』が開始された当初、方法論的な基軸を形づくっていたのは根本原則からの演繹であった。こうした行程は以下の枠組によって特徴づけられている。出発点となる三つの根本原則に基づいて、自我と非我のあいだにひそむ矛盾がまずは摘出される。この矛盾がもし克服されないなら、意識の同一性は当然破壊されてしまう。それゆえ、哲学者はこうした矛盾を調停し、新たな総合を可能にするための条件を発見するように迫られる。この「帰謬法的(apagogisch)」(GA I/2, 404)な演繹によって主導されて、『基礎』での論述は実践的部門の半ばに至るまで進展するのである。

しかし、まさにこの箇所、体系構成を主導する方法に決定的な転換が認められる⁴。実践的部門の後半部に至って、「発生的(genetisch)」(I/2, 404)な演繹が全面的に方法論的な基軸の地位に据えられるからである。こうした転換が生じたあとでは、哲学者による分析と総合の過程が体系構成の主導権を握ることはもはやなくなる。むしろ、哲学者の観察の対象である自我の側が問題となり、当の自我が自己を段階的に反省する過程が追究されるようになる。以上の過程をとおして、観察する哲学者の前で、自我が担う対象意識と自己意識が発生的に再構成されてゆく。それゆえ、この発生的な過程はいわば自己意識の歴史として特徴づけられるのである。

もちろん、こうした整理の仕方には異論の余地があるだろう。理論的部門の後半部は「表象の演繹」と命名されているが、この箇所において、自我が自己を対自化する過程はすでに導入されているからである。「人間精神の実際の歴史」(I/2, 365)という概念が決定的な仕方で登場するのも、まさに当該箇所においてである。だとすると、方法論をめぐる転換はむしろ理論的部門の後半部において生じていたことになりはしないか。

に示されている(Günter Zöller: *Fichte's Transcendental Philosophy. The Original Duplicity of Intelligence and Will*, Cambridge (Cambridge University Press) 1998, pp. 73-74)。

⁴ 体系構成を主導するふたつの方法のあいだで、自我とその同一性の果たす役割が重要な転換を遂げているという点については、前掲論文の以下の箇所を参照した(Stolzenberg: 2008, S. 98)。

確かに、以上の箇所において、根本原則からの演繹という第一の行程は自己意識の歴史という第二の行程にその座を譲り渡している。方法論をめぐる転換がまずは理論的部門の後半部に位置づけられるのは間違いないだろう。しかし、こうした転換はあくまで理論的部門の枠組の内部でおこなわれているにすぎない。これに対して、実践的部門においては、事情は明確に異なっている。その転換点に当たる箇所では、絶対的自我の内的構造が周到に解明され、非我定立の可能性の条件が絶対的自我の側に見定められたばかりか、「絶対的自我と実践的自我と知性的自我のあいだの真の合一点」(I/2, 405)が確立されるに至っている。『基礎』では、理論と実践は異なる二つの部門として事実上分断されていたが、実践的部門の後半部で追究される自己意識の歴史は、これらがはじめて統合された時点において開始される。衝動論の展開はこの自己意識の歴史と正確に重なり合っているのである⁵。

『基礎』によれば、「衝動(Trieb)」とは「自己自身を産出する努力」であるが、同時に「固定され、規定されていて、確定されたものである」(I/2, 418)。『新方法』においても、衝動とは「抑制された活動」であると同時に、「抵抗を取り除こうとする、内的な持続する傾向」(IV/3, 376)であると見なされており、両時期にわたってフィヒテの見解は一貫している。自我の内部で固定され、抑圧された状態を強いられながらも、こうした制約を突破し、自由な行為として自己を実現しようとする傾向こそが衝動なのである⁶。

このように、衝動は行為として実現される手前に位置づけられるため、明確な自覚を欠いており、自我に対して現れるときには、必然的に前意識的な形態を取らざるをえない。それゆえ、衝動はもっぱら「感情(Gefühl)」(I/2, 419)として意識される。衝動はつねに感情と対をなし、衝動論というこの特殊な領域を形づくっているのである。

したがって、衝動論をつうじて考察されるのは自我のこうした前意識的な領域となる。ところが、当の自我が反省の運動を繰り返すことで、前意識的な領域はしだいに意識化されてゆく。自我の自由は明確な自覚に基づいて成立するという観点から見れば、次のように捉え直すことも可能だろう。衝動そのものに内在する傾向が展開されることで、自由な行為を可能にする諸条件が次々に導出される。その結果、この自由な行為の主体となる自我が哲学者の前で発生的に再構成されるのである。衝動論の展開が自己意識の歴史と重なり合うのはまさにこうした理由に基づいている。

それでは、この発生的演繹の過程はより具体的にどのように展開されるのか。その出発点となるのは、以下に定式化される絶対的自我の構造である。「自我は自己自身によって定立されたとして(als)自己を定立すべきである」(I/2, 406)。この定式化に従えば、絶対的自我による自己定立の活動には、自己を反省しようとする働きが同時にそなわっている。しかし、絶対的自我の内部

⁵ 以下の研究によれば、『基礎』の両部門はそれぞれ「分析的部門」と「精神の実際的歴史記述」に下位区分される。この解釈自体は妥当だと考えられるが、実践的部門においては理論と実践の統合が試みられており、体系構成上の重要な変化が生じている点は看過されるべきではないだろう(Eckart Förster: *Die 25 Jahre der Philosophie. Eine systematische Rekonstruktion*, Frankfurt am Main (Klostermann) 2011, S. 215f.[エッカート・フェルスター(三重野清顕ほか訳): 哲学の25年—体系的な再構成(法政大学出版局) 2021, 341-342頁])。

⁶ イェーナ期のフィヒテの衝動論を概観した先行研究として、特に以下の文献を参照した(Alois K. Soller: *Trieb und Reflexion in Fichtes Jenaer Philosophie*, Würzburg (Königshausen und Neumann) 1984; 玉田龍太郎: フィヒテのイェーナ期哲学の研究(晃洋書房)2014)。

に閉ざされている目下の段階においては、自我は自己の活動を現実には反省するには至っていない。そのためには、この直接的な統一の内部に分離が引き起こされ、意識化が成立するための条件が整う必要がある。こうした分離を引き起こすのが非我による障害なのである。

障害によって妨げられるとき、自我の活動が外へと向かってゆく方向からは「実在的活動(reale Thätigkeit)」が、内にむかって還帰する方向からは「観念的活動(ideale Thätigkeit)」(I/2, 423)がそれぞれ出現する。こうした両者の分離に基づいて、観念的活動が実在的活動を意識化するとき、自我の反省ははじめて現実には成立する。と同時に、互いに性格を異にするこのふたつの活動から、理論と実践を統合的に演繹するための基盤があわせて確立されるのである⁷。

とはいえ、この演繹の過程の端緒においては、自我は自己の自由な活動をまだ自覚することはできない。そうした自由な活動へとむかって、自我はただ駆り立てられている。要するに、ここでの自我はもっぱら衝動によって支配されているのである。この衝動が感情というかたちで反省の内部に現れるとき、まず、自我のうちには同時に二つの側面が成り立つことになる。

自我の内部で反省が引き起こされるには、自我の活動が非我の障害によって限定を被る必要があった。ところが、これによって自我の活動が全面的に廃棄されてしまうわけではない。この活動はそれどころか、非我による制約を突破して、その彼方へとむかって駆り立てられる。このとき一方には、「強制(Zwang)」ないしは「不可能(Nichtkönnen)」(I/2, 419)の感情が現れる。自我の努力が非我によって阻害されるという、客観に関わる側面がまずは意識されるからである。しかし他方で、自我はこうした障害に屈服せず、非我による制約を突破しようとする。この主観をめぐる側面は意識の内部にさしあたり現れることはない。初発の段階では、こうした側面はまだ意識化されていないのである。

その理由をめぐっては、以下のように定式化できる。〈反省する働きそのものは反省されない〉という、意識に固有の構造によって制約されているために、自我は自己の活動の自覚を妨げられているのである。この点を解明するには、自我と非我の関係ではなく自我の自己関係に基づいて、目下の場面を捉え直す必要がある。

自我の内部に「自己感情(Selbstgefühl)」(I/2, 424)が出現するとき、「感ずるもの」と「感じられるもの」(I/2, 428)、すなわち、主観としての自我と客観としての自我はすでに同時に成立している。ところが、前者が後者を反省する働きはただ哲学者によってのみ洞察され、その観察の対象となる自我によっては意識されない。それゆえ、意識されるのはもっぱら後者の側であるほかない。阻害や強制の側面だけがさしあたり反省の内部に現れるのはこのためである。

とはいえ、意識に内在するこの構造は、反省の作用を妨げる制約としてのみ機能しているわけではない。自我が自己を限定する働きが自覚されない以上、こうした限定を引き起こす根拠は自我の外部に想定される。こうして内から外への転移が無自覚におこなわれることで、非我が自我から独立に存在し、自我にむかって働きかけるという見かけが当の自我の内部に生まれるのである。「自我の自己自身との交互作用」に基づいて、「自我と非我のあいだの交互作用」ははじめて導出される(I/2, 412)。自我の自己関係の側から非我との関係を開くことで、対象認識を可能にする

⁷ 『新方法』でも、「実在的活動」と「観念的活動」の両者は重要な役割を果たしているが、おのおのに帰せられた基本的な機能は変化していない。観念的活動が担う機能は「実在的活動を単に純粋に模写する(abbilden)」働き、すなわち、実在的活動を意識化する働きである(IV/3, 359)。

枠組を演繹することが衝動論における重要な狙いなのである⁸。

以上に示したとおり、反省する働きそのものは自覚されないという制約ゆえ、自我は自己の活動の一側面しか捉えることができなかった。それゆえ、自我に対して求められるのは、この反省する働きを反省することである（「反省するものに対する反省」(I/2, 427)）。これは要するに、客観としての自我から主観としての自我に反省を向け変えることである。さらに言い換えれば、非我によって限定を被った自我から、この限定の彼方を目指して努力する自我へと意識を転換することである。こうした彼方へとむかって自我を駆り立てる衝動とは「憧憬(Sehnen)」(I/2, 431)であるため、この憧憬の衝動こそが次なる反省の対象となる。

憧憬の衝動によって駆り立てられて、非我を全面的に克服するなら、このとき自我は自己の「理想」(I/2, 432)を完全に実現することができる。ところが、非我による制約はつねに残存し、自我を拘束しつづける。それゆえ、所与の「実在的なもの」(I/2, 434)を「規定(Bestimmen)」し、「変容(Modificiren)」(I/2, 434)して、自己の理想を部分的に達成することで、自我はさしあたり満足するほかない。

自我が現実と理想のあいだで引き裂かれ、両者を調停するという道を選ぶとき、憧憬と強制という二つの側面は総合される。能動と受動のどちらか一方ではなく、両者は不可分に合一されるのである。非我の側に明確な変化が現れるのはここにおいてである。これまでは単なる「外界(Aussenwelt)」(I/2, 431)でしかなかった非我が有限な規定性を担い、具体的な「性質」(I/2, 436)を具備するようになる。さらに、これらの性質を支える担い手として、「物(Ding)」(I/2, 440)が客観として想定されるに至るのも、これまた重要な変化である。

もっとも、自我から独立に非我が想定されているわけではない。実際には、前者から後者へと「転移がおこなわれて(übergetragen)」(I/2, 437)いるからである。目下において、客観は他の性質から区別される性質をもつと同時に、物としての自存性をも具備している。それゆえ、「規定されると同時に規定する」もの、ないしは「自己自身によって規定される」(I/2, 437)ものとして、あたかも自我から独立に存在するかのような見かけをまとっている。ところが、その真相はもっぱら自我の側に見出される。主観と客観を包括し、自己完結性をそなえた自我がそうした物の正体なのである。自我がこの統体としての自己に反省を向けるとき、自己は単なる客観として外界に投影される。上述のように、反省する働きそのものは自我によっては自覚されないからである。自存する物が自我に対して現れるのはこうした投影の結果でしかない。

自我の自己関係から非我との関係がふたたび導出されたことで、反省の過程には段階的な進展が認められる。こうした過程が反復されるたび、主観および客観はより具体的な内実を獲得してゆくのである。その結果、対象認識を可能にする枠組がここに至って決定的な仕方で演繹される。

憧憬の衝動によって駆り立てられて、自我は非我を自己のもとへと服属し、変容しようとしていた。ところが、物やこれにそなわる性質は自我による変容の行為に抵抗する。それゆえ、自我は客観をただ「模像(Nachbilden)」(I/2, 436)することによって、自己の内部に写し取るほか

⁸ 管見のかぎり、『基礎』の衝動論を最も詳細かつ正確に分析したのは以下の研究である(Petra Lohmann: *Der Begriff des Gefühls in der Philosophie Johann Gottlieb Fichtes*, Amsterdam (Rodopi) 2004, S. 63-93)。感情においては、自己や対象との関係はもっぱら主観の内部に現れているが、当の主観はその根拠を客観の側に帰してしまう。同書では、こうした構造が「感情の二重の規定(Doppelbestimmung)」と名づけられている(S. 70)。

ない。このように、客観を意識に反映する機能をつかさどっているのが「直観(Anschauung)」(I/2, 436)の活動なのである。以上をもって対象認識の働きが演繹されたことで、実践の側から理論を導出するという作業は成功へと導かれており、両者の統合的な演繹という当初の課題は満足の行く解決を見たようにも思われる。

ところが、ここには明らかな限界が認められる。自我の反省の過程に基づいて実践から理論を演繹することには成功したものの、この対象認識の枠組をふたたび実践へと関連付ける仕方は不明瞭なままである。さらに、理論と実践が不可分に結びつくことで、本来ならば自我の最終的な統一への還帰が成し遂げられるべきであるのに、こうした作業を果たすこともできていない⁹。この未完結性ゆえに、衝動論をとおして展開された新たな方法はその射程を生かし切ることができないままに終わっている。この欠陥の克服と、完成の作業は次の時期の知識学、すなわち『新方法』へと委ねられたのである。

その間に、フィヒテは『基礎』が抱えていたさまざまな不備をも自覚することとなった。新たな体系構想の下で展開され、本格的に刷新がおこなわれた『新方法』では、『基礎』には見出されなかった新機軸がいくつか認められる。

『基礎』では、自我による行為のモデルに具体性が欠落しているという憾みがあった。これに対して、『新方法』では目的合理的な枠組が自我の活動に導入されている。この枠組に従えば、自我はさまざまな可能性のなかから一定の「目的(Zweck)」(IV/3, 364)を選択することで、自己の行為を現実化する。このように目的概念の構想が自我の行為を導いていると見なすことで、自我の行為ははるかに具体的に把握されるし、これを下支えする衝動は潜在的な能力として、より明確に位置づけられる。

さらに、『基礎』では意志論の枠組が欠落していたことも、大きな難点として指摘することができよう。これに対して、『新方法』では自我による意志の働きが体系の中心に据えられているため、この意志との関係で衝動をどのように位置づけるかが新たな問題となってくる。

そこで次章では、『基礎』の衝動論で胚胎した構想が『新方法』に至ってどのように完成へと導かれたか、を考察してみたい。

2

『基礎』から『新方法』への移行過程には、多くの変化が認められる。自我の概念を思惟せよという「要請(Postulat)」(GA IV/3, 345)から開始される点。「知的直観(intellectuelle Anschauung)」(IV/3, 347)の活動が自我の根柢に認められ、「わたしはわたしを定立するとして(als)定立する」

⁹ ただし、「衝動」と「行為」の一致について論じた、『基礎』の末尾における記述は注目に値する(I/2, 449ff.)。こうした一致に基づいて「自我の自己自身による交互規定」が導入されたことで、上昇の道の最終的な到達点がすでに洞察されているからである。とはいえ、当該箇所での論述はまだ原型的なものにすぎないし、意志論の枠組が欠落しているため、道徳哲学を可能にする基盤がそもそも確立されていない。こうした枠組が成立するには、のちの『新方法』を待たねばならなかったのである。『基礎』の末尾で円環が閉じられ、論証が第一原則へと還帰している、という解釈を示す先行研究もあるが(Förster: 2011, S. 222f.[フェルスター: 2021, 354-355頁])、当該箇所に関しては、論述そのものの不完全性が指摘されるべきではないだろう。

(IV/2, 30)¹⁰という定式化が体系構成の最初の段階から導入される点。これらが重要な変化であるのは確かだろう。

しかし、体系構成を主導する方法論的な変化という点では、以下の二点が特に重要である。根本原則からの演繹をもはや方法としては継承せず、発生的な演繹を最初から軸に据えている点。さらに、理論と実践が緊密に結びついた仕方で演繹されている点である。上述のように、『基礎』の実践的部門後半部で、こうした変化はすでに明示的に出現していた。これに基づいて、新たな体系を真っ向から実現したのが『新方法』なのである。その前半部を詳細に分析しながら、以上のふたつの変化を丹念に洗い出してみよう¹¹。

本章での論述を開始するにあたって、自我の「絶対的な自由の行為」(IV/3, 360)が同時に「規定された行為(ein bestimmtes Handeln)」(IV/3, 350)である、と見なされている点にまずは着目してみたい。絶対的自我の自己定立ではなく、自己を有限化する行為が出発点に置かれるのが、『基礎』とは異なる『新方法』の重要な特色だからである。

自我の行為がこのように捉え直されたことで、『新方法』にはさらに別の特色が付け加わる。自己を規定する行為が出発点に置かれるとき、そうした行為がまだ規定されていない状態が前提される。自我の自由な行為とは「非規定性から規定性への移行(Uibergehen von der Unbestimmtheit zur Bestimmtheit)」(IV/3, 360)なのである。非規定性は「規定可能性(Bestimmbarkeit)」(IV/3, 363)と同一視されるため、自我の活動の内部には、可能性から現実性への移行が最初から組み込まれることになる。これは要するに、自らに潜在する「能力(Vermögen)」を現実化して、「活動」を生み出す働きであるとも言える(IV/3, 360)。

『基礎』では、絶対的自我が自己から外に出て、その活動を現実化するには、非我の障害が不可欠な契機であると見なされていた。ひとたび反立されると、非我は自我の側によって制約されるが、非我が反立される「こと(daß)」自体は「意識の事実」であって、自我の側から導出されることはできない(I/2, 390)。こうした構造は「第二原則の真の意味」(I/2, 390)とも呼ばれ、『基礎』の根柢に横たわっていた。「物自体(Ding an sich)」(I/2, 414)の解消不可能性はこの原理的な問題に淵源しているのである¹²。

ところが、自己内に閉じた絶対的自我を認めず、自己を有限化する活動を根柢に据える『新方

¹⁰ クラウゼ手稿にも類似した表現は認められるが、ハレ手稿の方がより明確であるため、当該箇所のみ後者から引用した。

¹¹ 『新方法』の構造を的確に概観した文献として、まずは以下を参照した(Daniel Breazeale: The Wissenschaftslehre of 1796-99 (nova methodo). In: *The Cambridge Companion to Fichte*, eds. D. James and G. Zöller, Cambridge (Cambridge University Press) 2016, pp. 93-138. 特にpp.107-119)。クラウゼ手稿では、第一講から第十三講までが「上昇」、第十四講から第十九講までが「下降」の行程であるが、本論で取り扱っているのはもっぱら前半部である。

なお、『新方法』の具体的な解釈をめぐることは、以下の研究から多くの示唆を得た(櫻井真文: 前期フィヒテの意志論の全容(同志社大学博士論文)2018、52-83頁)。

¹² 『基礎』の段階では、自我から独立に存在するものとしての「物自体」を完全には清算できていなかったが、『新方法』に至って克服が成し遂げられ、このことが自我の内的構造の把握に顕著な相違を引き起こした、という点については以下の論考から多くの教示を得た(藤澤賢一郎: フィヒテに於けるスピノザ主義と反スピノザ主義—知識学の変説問題への一視点[『大阪大学人間科学部紀要』第8号、1982、105-146頁]121-132頁)。

法』では、非我は自我の活動の否定態として位置づけられる。自我が自己を規定する働きは、その結果として自己を固定することで、自我そのものの概念を産出する活動となる。これに対して、自己規定の働きが背負っている規定可能性は、自我によって現実化されなかった活動から成り立っているため、この活動が自我の外部に投影され固定されると、非我となって現れる。言うなれば、自我が自己から排除し、否定したものが非我となるのである。

それゆえ、「非我は単に定立されたもの、単なる存在によって規定されるもの」でしかなく、「非我の概念はただ行為から導出される」(IV/3, 352)。以上のことから、「物自体としての非我は不条理である」(IV/3, 356)と見なされ、『基礎』ではまだ残存していた物自体は『新方法』に至って完全に消去される。これに伴って、知識学には重要な変化がもたらされる。物自体を抹消したことで、自我の自己規定の活動がより一貫した仕方で解明されるからである。

『基礎』では、「規定可能性」と「規定性」という概念が重要な役割を果たしていたのは理論的部門の実体性の総合においてである¹³。ところが、両概念を最初から導入し、可能性から現実性への移行として自我の活動を把握したことで、『新方法』では自我の行為のより明確なモデル化が実現される。「現実的な行為」(IV/3, 370)が成り立つためには、さまざまな行為の可能性があらかじめ「与えられて(gegeben)」(IV/3, 368)いなければならない。これらの「可能的な行為」(IV/3, 370)のなかから特定の行為を「選択(Wahl)」(IV/3, 368)することで、自我は「目的(Zweck)」(IV/3, 364)の概念を構想することができる。こうして自我は「自発的に[目的]概念を構想するとき、自由に行為する」(IV/3, 364)のである。目的を志向する存在として自我を捉える観点が『新方法』に至ってはじめて確立される¹⁴。

以上の変容をとおして、衝動論にはより適切な位置づけが与えられることになる。単なる可能性の状態においては、自我はまだ自由に働くことを許されず、強制を被った状態にある。本来は自由な自我の活動がこうして「抑制された活動」(IV/3, 376)となると、自我の内部に衝動が生まれる。ところが、衝動は同時に、こうした「抵抗を取り除こうとする、内的な持続する傾向」(IV/3, 376)でもある。可能性の状態から自己を解き放ち、自由な行為を現実化しようとする努力に衝動は基づいている。以上の枠組が設定されたことで、衝動が占める地位は、自我の行為を下支えする「能力」(IV/3, 375)としてより明確化されたのである。

『新方法』における基本的な枠組が確認されたところで、次に、自我が目的概念を構想する仕方を考察する段へと歩みを進めよう。こうした考察をとおして、『基礎』から継承された発生的演繹の過程はより一貫した仕方で追究されることになる。

まず問題となるのは、目的概念を構想するための「素材」(IV/3, 384)である。こうした素材はもっぱら「感情」(IV/3, 384)の側に求められる。衝動とは自由な行為が確立される手前の、いまだ強制を被った状態であるが、この強制が意識されることで自我の内部に感情が現れる。このと

¹³ なお、実践的部門の後半部にも両概念が登場する箇所は認められるが、もっぱら表象作用の成立に関わる場面である(I/2, 438)。

¹⁴ 以下の研究に従えば、『新方法』ではもっぱら目的合理的に働く実践的自我をモデルとして、自我の内的構造が把握されている(藤澤：1982、127-128頁)。

なお、これに先立って、『知識学の原理による自然法の基礎』(第一巻1796年、第二巻1797年、以下『自然法論』と略記)で、自我の構造のこうした変化はすでに顕在化しているように思われる(I/3, 329-334)。

以上の構造がより厳密に解明されたのが『新方法』なのである。

き感情は単一の状態にとどまるわけではなく、もろもろの多様な感情が生み出されるため、これらの感情をとおして、一定の選択の可能性が自我のもとに開かれる。これらの可能性のなかから、ひとつの選択肢を取り出して現実化することで、目的概念は構想されるのである。感情が目的概念の素材と見なされる理由はまさにここにある。

それでは、「自我はどのようにして感情の多様なものから目的概念を構成するのか」(IV/3, 384)。この「形式的な部分」(IV/3, 384)の解明が次の課題となる。「感情の多様なもの」が素材であるとしたら、自我はこのさまざまな素材をどのように関連づけ、結合して、その結果として目的概念を構成するのであろうか。この構成の仕方、すなわち形式の側がこれから究明されるべき課題となるのである。

以上の課題の解決は大きく見て、前半と後半に分けられる。前半部では、まずは「感情」から「直観」への移行が、次に「直観」から「概念」への移行が考察される。これらの過程をとおして、行為の側から対象認識の枠組を演繹するのが前半部の課題となる。

ここでは、『基礎』で展開された行程が反復されている。両者のあいだにはさまざまな相違が認められるが、こうした相違は多分に演繹の仕方に関わっており、基本的な枠組は『基礎』から直接に継承されている¹⁵。

まずは、感情から直観への移行が考察される。この段階では、自我の実在的活動が抑止されたことで限定が生まれ、この限定はもっぱら感情をとおして意識される。この感情に直観の働きが向けられることで、直観は感情を客観化することに成功するのである。このとき、自我の内部には自己関係が成り立っているが、こうした自己関係は当の自我によって自覚されることはない。直観の働きはさしあたり客観の側へと向かうため、主観の側には向かわないからである。「自我は直観の客観のうちに自己自身を失い」、直観の働きは「盲目(blind)」となる(IV/3, 390)。こうした枠組においては、限定を引き起こすものはもはや自我の側ではなく、もっぱら非我の側に見出される。「直観作用に反立されたものはわたしの外に定立され」るため、自我から独立した非我が自我を限定する、という見かけが当の自我に対して出現するのである(IV/3, 388)。ここでも、自我の自己関係を基盤として、非我との関係が導き出されているのは明らかである。

以上をもって、感情から直観への移行が確認された。それでは、直観から概念への移行はどのようにして果たされるのか。

前段階では、自我の実在的活動が抑止されたことで感情が生じ、この感情に直観の働きが向けられたのであったが、現段階では直観の働きそのものが直観されて、観念的活動の側が意識化されることが必要となる。そのためには、直観の働きの内部に新たな限定が出現せねばならない¹⁶。ここで重要な役割を果たしているのは単なる特定の感情ではなく、さまざまな感情どうしの「変化(Veränderung)」(IV/3, 395)である。衝動の領域においては「限定性(Begrenztheit)の感

¹⁵ ただし、『基礎』と『新方法』のあいだで、感情の位置づけに変化が生じていると見なす解釈も存在する(Lohmann: 2004, S. 141-174)。第一に、『新方法』では自己感情が主観の根本状態と見なされ、ここからあらゆる感情が演繹されている点、第二に、道徳感情が『新方法』における自我の対自化の過程の最終的な目標である、と解釈されている点は重要であろう。

しかし、本論ではあえて細部には立ち入らず、衝動論をめぐる基本的な枠組と、体系内におけるその位置づけを考察する作業に注力した。

¹⁶ この新たな限定は「限定性の限定(eine Begrenzung der Begrenztheit)」(IV/3, 404)とも呼称されている。

情」のみならず、「努力(Streben)の感情」も同時に喚起されるため(IV/3, 391)、前者をとおして「現実的な客観」が、後者をとおして「可能的な客観」が生み出される(IV/3, 390)。こうした枠組に従って、意識の内部に変化が引き起こされるのである¹⁷。

こうした変化が直観される時、直観の働きはこの「多様なものを」、すなわち、互いに異なる感情どうしを「他のようにではなく、このように秩序づけるべく拘束される」(IV/3, 399)。この新たな限定をとおして、もろもろの感情を秩序づける自己同一的な主体が「変化において持続するもの」(IV/3, 396)としてはじめて意識されるのである。こうした主体とは「観念的に行為するもの(das idealiter handelnde)」(IV/3, 396)、すなわち、直観する自我にほかならない。

ここに至って自我はついに直観を直観するのであるが、こうした自己直観から、一方において「概念(Begriff)」(IV/3, 403)が演繹される。「自由の意識を伴って定立される観念的活動」(IV/3, 403)とは概念だからである。また他方において、さまざまな感情どうしの変化を支える基体として、持続的な「物」(IV/3, 398)が自我の外部に投影される。「物」と「表象」の区別がここにおいて始めて確立される(IV/3, 406)。

直観の働きが直観されて、概念が演繹される段階にまで、『基礎』での論述は到達していなかった。この未完結性が克服されたのは重要であるが、『新方法』はさらにその先へと進んでゆく¹⁸。行為の側から対象認識の枠組を演繹し、「概念一般はいかにして可能か」(IV/3, 405)を究明した前半部に対し、後半部ではこうした枠組がふたたび実践の側へと関連づけられ、「目的概念はいかにして可能か」(IV/3, 404)という問題をめぐって解決が図られるようになるからである。

この後半部においても、可能性と現実性は重要な役割を果たしている。直前の段階で演繹されたのは「規定された物の概念」(IV/3, 406)であったが、この規定されたものが「規定可能なもの」(IV/3, 410)を前提として成立するのは明らかである。この可能性の領域に基づいて、「空間(Raum)」(IV/3, 412)が演繹される。特定の客観が生み出されるとき、これを一般的に包摂する空間が同時に成立している。その根柢にあるのは、自我の活動の「規定可能であるが、規定されてはいない能力」(IV/3, 412)である。

以上は、さしあたり認識の枠組において考察されている。ところが、こうした枠組はふたたび実践的な観点から捉え直される必要がある。「空間規定」をおこなうための要件となるのは、一定の場所へと移動するために「どれだけの力の消費(Kraftaufwand)を適用せねばならないか」を知り、自らの「努力を見積もる」ことだからである(IV/3, 422)。自我の努力が「あらゆる空間規定の尺度(Masstab)」(IV/3, 433)である。自らに潜在的にそなわる「力(Kraft)」(IV/3, 423)に基づいて、自我は空間を具体的に把握し、空間のどんな場所にも特定の客観を自由に定立できる。目的概念の構想が具体的に成立するのはまさにこの場面においてである¹⁹。

¹⁷ 以下の研究では、『基礎』で重要な役割を果たしていた「憧憬」の感情が『新方法』には登場しないと主張されているが(Lohmann: 2004, S. 155)、「努力の感情」がこれに対応するという見方は可能だろう。

¹⁸ より正確に述べれば、『基礎』では、理論的部門の「表象の演繹」で直観から思惟への移行の過程が究明されている。しかし、この過程を先に論じてしまったために、実践的部門の後半部では論述が行き詰まっているように思われる。

また、「空間」と「時間」に関しては、『知識学の特性綱要』(1795年)ですでに演繹が試みられている(I/3, 193-208)。『基礎』との関連でいえば、理論的知識学の特殊部門として位置づけられる著述であるが、これらの概念の演繹をめぐっては、『新方法』とは導出の仕方を異にしている。

¹⁹ ここで初めて、自我は「身体(Leib)」として空間の内部に受肉することになる。表象の能力と実践の能

こうした枠組が確立されたのは、潜在的な能力として捉えられた衝動が自我の外に投影され、固定された結果、世界が具体的な空間として出現したからである。演繹の過程が進展するにつれ、衝動は発展的に解消されてしまうのではなく、自由な行為が成り立つための基盤として、つねに機能し続けている。

とはいえ、自由な行為の成立にとっては、「意志(Wollen /Willen)」(IV/3, 423)の働きこそが根源的である。自我において、意志は「直接的で、第一のもの」(IV/3, 423)だからである。それでは、意志の作用は衝動とどのように媒介されているのだろうか。叡知界と感性界を結ぶ「媒介項」(IV/3, 434)として、意志の働きを空間の内部に実現する役割を果たしているのは「時間(Zeit)」(IV/3, 429)である。

自由による「原因性(Causalitaet)」(IV/3, 427)に基づいて、意志の働きは成立する。この自己規定の活動をとおして、「感情の状態」(IV/3, 427)に一定の変化がもたらされ、或る感情から別の感情への移行が引き起こされる。ところが、この自己規定の行為そのものは「時間に属してはいない」(IV/3, 429)。この行為をとおして「経験(Erfahrung)」(IV/3, 429)が開かれるとき、或る感情から別の感情への「移行」だけが「時間に属している」のである(IV/3, 429)。ここに至って、意志と衝動のあいだの接点が浮かび上がってくる。

叡知界から感性界へと向かう垂直的な運動が水平的な時間軸を生み出し、一定の系列を開始するところに、意志の働きは成立する。これに対して、衝動はもっぱら感性界の側に位置づけられるため、水平的な時間軸に従って、可能性から現実性への移行を目指そうとする。ところが、衝動のみでは、こうした現実化は単なる傾向にすぎないし、傾向によって衝き動かされている限り、自我は自由をもつことはない。「規定可能性から規定性への移行の根拠」(IV/3, 428)となるのは意志の働きであり、この垂直的な運動が介入することをとおしてのみ、自我は自らの自由によって衝動を司ることができるのである。

しかし、ここには重要な問題がひそんでいる。行為がそもそも可能となるには、これを一定の仕方で方向づける客観の認識が前提されねばならない。ところが、こうした客観の認識は行為をとおしてはじめて切り開かれる。意志の働きといえども、こうした「循環(Zirkel)」(IV/3, 436)を免れることはできないのである。『新方法』において、『基礎』での論述がはじめて完成へと導かれたことで、理論と実践の統合が抱える原理的な問題が露呈している²⁰。

力を同時に可能にする結節点として、身体は重要な役割を果たしているが(IV/3, 422)、本論では立ち入った考察をおこなうことはできなかった。

『新方法』における身体の問題をめぐることは、たとえば以下の文献が参考になる(Ludwig Siep: *Leiblichkeit bei Fichte*. In: *Kategorien der Existenz. Festschrift für Wolfgang Janke zum 65. Geburtstag*, hrsg. von K. Held und J. Hennigfeld, Würzburg (Königshausen & Neumann) 1993, S. 107-120[ルートヴィヒ・ジープ(上妻精監訳): ドイツ観念論における実践哲学(哲書房)1995、553-581頁])。

²⁰ 『新方法』における「循環」の問題をめぐることは、特に以下の先行研究を参照した(藤澤賢一郎: フィヒテ自我論の射程—自己意識・個性・相互人格性[廣松渉ほか編『講座ドイツ観念論』第3巻、1990、223-292頁]256-265頁; Christian Klotz: *Selbstbewußtsein und praktische Identität. Eine Untersuchung über Fichtes Wissenschaftslehre nova methodo*, Frankfurt am Main (Klostermann) 2002, S. 142-159; Ulrich Schwabe: *Individuelles und Transindividuelles Ich. Die Selbstindividuation reiner Subjektivität und Fichtes Wissenschaftslehre. Mit einem durchlaufenden Kommentar zur Wissenschaftslehre nova methodo*, Paderborn (Schöningh) 2007, S. 513-528)。

こうした循環が解決されるには、単に感性界において成り立つ「選択意志(Willkühr)」(IV/3, 440)から、叡知界に位置づけられる「純粹意志(der reine Willen)」(IV/3, 439)が区別される必要がある²¹。純粹意志は感性的直観の形式を超え出ているため、もっぱら「知的に直観される」(IV/3, 439)。それゆえ、こうした意志は「客観の認識を前提せず、すでに自らに伴っている」(IV/3, 439)。

純粹意志と経験的意志のこうした区別を確立することで循環の隘路は打破されるのであるが、以下において、こうした構造をより詳細に検討してみよう。行為という観点から見ると、意志の働きは「自由(Freiheit)」に基づいている。しかし、客観の認識という観点から見ると、意志は感情に基づく「限定性(Beschränktheit)」によって制約されている(IV/3, 436)。ならば、自由と限定性が同時に可能となる場を見出すことで、循環は解決されるはずである。こうした場とは「規定可能性」(IV/3, 436)の領域である。

まずは、経験的意志の側から考察してみよう。「自由とは規定可能なものから規定性への絶対的な移行である」(IV/3, 436)。こうした選択の行為に関して、自我はもっぱら自由である。ところが、自由な選択の余地にも一定の幅が存在するため、規定可能性の領域そのものは規定された「有限な量(ein endliches Quantum)」(IV/3, 436)である、と見なすこともできる。この観点から見ると、自我の自由はあらかじめ限定されている。

これに対して、純粹意志はどうであろうか。こうした意志の働きにおいて直観されるのは、「現に存在はするが、生成することのない規定性」(IV/3, 439)である。これは時間の形式へと介入する以前における自己規定である。すなわち、可能性の領域を一定の仕方で限定し、経験そのものが成り立つ場を開く働きである。こうした自己規定の作用がそもそも「開始される限りにおいて、自由は存在する」。しかし、「ただしかじかの仕方で開始されうる限りにおいては、規定性が存在する」のである(IV/3, 438)。

以上の構造をとおして、純粹意志と経験的意志は緊密に統合されている。その際に、重要な機能を果たしているのが可能性と現実性という対概念なのである。

意識の内部に可能性の領域を開く役割は、叡知界に由来する純粹意志の働きに求められる。ところが、こうして開かれた可能性を感性界において担い、これを現実化しようとつとめるのは衝動である。衝動がこうした基盤としての役割を果たすからこそ、経験的意志は与えられた可能性を見出し、これを自由に現実化することができる。衝動は叡知界と感性界を架橋しながら、前者から到来する純粹意志の働きを経験的意志に接続するための、緩衝としての機能を果たしているのである。

いくつかの先行研究で指摘されているが、循環を最終的な解決へと導くのは「促し(Aufforderung)」であり、他者を媒介とした自我の個体化である。こうした相互人格性の問題は『新方法』の後半部で重点的に論じられるが、本論では立ち入った考察をおこなうことはできなかった。なお、行為と認識の循環が促しによって解決される、という枠組はすでに『自然法論』で重要な役割を果たしている(I/3, 340-343)。『新方法』では、こうした枠組がより原理的な仕方で捉え直されたのである。

²¹ 以下の研究に従えば、イェーナ期知識学の到達点とは「自由な自己決定への理性の命令」に基づいて主観性を根拠づけることであるが、その基盤となるのが「純粹意志」である(Zöller: 1998, p. 109)。この時期の知識学において、純粹意志はこのように枢要な役割を果たしている。

むすび

『基礎』と『新方法』をつなぐ結節点は衝動論にある、と考えられる。『基礎』の衝動論では、発生的演繹という方法が導入され、理論と実践が緊密に統合された仕方で論述が進められているが、『新方法』ではこうした方法上の変化が直接に継承されているからである。『基礎』の段階では、こうした転換は十分に生かされることなく、もっぱら不完全な状態を余儀なくされていた。以上の結果を受け止め、新たな体系によってこの欠陥を克服したところに、『新方法』が達成した重要な功績が認められる。さらに、『新方法』では上昇の道が完遂され、意志論が確立されたことで、衝動論が体系において占める位置もより明確化されている。ここにも、新たな体系によって成し遂げられた功績が確かに認められるだろう。

とはいえ、『基礎』から『新方法』への移行はこうした完成の過程であると同時に、変容の過程でもあるのを見逃してはならない。とりわけ衝動論との関連において、以下の三点を指摘しておきたい。第一に、自我の行為における目的概念の構想が重視された結果、衝動は自我の能力として明確に位置づけられるようになった。第二に、抑圧された活動である衝動においては、自我の自由は必然的に拘束されることから、客観的世界の成立の基盤が衝動の側に見定められた。第三に、自我の能力である衝動に可能性の領域を担う役割が与えられたことで、叡知界に由来する意志の働きを感性界に接続するための展望が開かれた。

このように衝動が可能性の領域として捉え直されるに至って、知識学は意志による決定論に陥ることを免れている。純粹意志による自己規定を基軸とする一方で、経験的意志に対しては自由な選択の余地が残されているからである。可能性と現実性という対概念を知識学の根幹に導入したことで、叡知界と感性界のこうした統合ははじめて可能となっている。

『基礎』から『新方法』への移行過程を究明するには、自我の個体化や相互人格性の問題、身体に与えられた特別な位置づけなど、他にも重要な課題が論じ残されている。さらに、『知識学の原理による道德論の体系』(1798年、以下『道德論』と略記)においても、衝動の概念は詳細に論じられており、『新方法』との関連で立ち入った考察を必要としている²²。これらの課題については他日を期し、本論ではもっぱら衝動論という視座に立って、『基礎』から『新方法』への移行過程を再構成したことに満足したい。

²² 比較的近年に現れた以下の論考では、衝動論は狭義の超越論哲学からは排除され、『道德論』のような応用知識学に限定されるべきだ、とする主張が展開されている(Andreas Schmidt: Streben und Trieb. Zur Demarkationslinie zwischen Transzendentalphilosophie und Anthropologie in Fichtes Wissenschaftslehre. In: Internationales Jahrbuch des Deutschen Idealismus, Bd. 13, Berlin (Gruyter) 2018, S. 59-73)。

自我の活動は本来「純粹な現実性」であるはずだが、衝動が考察される限り、問題となるのは「能力の現実化」(S. 72)でしかなくなってしまい、可能性の領域が自我の活動の内部に入り込むのを防ぐことができない。それゆえ、衝動論は狭義の超越論哲学とは相容れない、と結論づけられるのである。しかし、可能性と現実性という対概念を超越論哲学の枠組に全面的に導入し、自我の活動に能力が成り立つ余地を開くことで、意志による決定論を回避したのが『新方法』の重要な功績ではないだろうか。だとすると、衝動論は狭義の超越論哲学から排除されるどころか、その不可欠な構成契機を形づくっている、と見なされるべきだろう。

上記の文献に関しては、櫻井真文氏から貴重なご教示をいただいた。あらためて感謝の意を表したい。